

## 2. 自然に配慮した葬法から見る「つながり」の再検討

### —日本の樹木葬とイギリスの自然埋葬の事例から—

宮澤 安紀

筆者はこれまで、日本における新たな葬送の形態である樹木葬<sup>1</sup>を調査するなかで、現代社会における多様な「つながり」のあり方を模索してきた。1年目には自然保護団体が運営する自然再生型の墓地の事例を、2年目には新宗教団体が開設した樹木葬型の墓地の事例という、一般的な樹木葬墓地からすればやや変則的な事例を取り扱ってきたが、これは樹木葬墓地の多様化を通して、現代社会における「つながり」の可能性を様々な角度から検討する試みでもあった。

最終年度の本論文では、上記の報告や筆者のこれまでの研究資料を通じて、改めて樹木葬——世界的な「自然葬法」<sup>2</sup>の一種としての自然に配慮した葬法——における「つながり」について考察を進め、さしあたっての见解をまとめたと考えている。特に、これまで繰り返し言及してきた「つながり」とはそもそも何であるのかを、筆者の観点から、いくつかの議論を参照しつつ一度整理し直す。そのうえで、本報告では日本の樹木葬墓地の事例に加え、イギリスで行われている自然葬法（自然埋葬 natural burial）を新たなデータとして参照しながら、「つながり」の多様なあり方を提示し、今後の可能性を展望したい。

#### 1. 現代社会における「つながり」の再検討

そもそも、なぜ今になって、死者をめぐる新たな「つながり」が模索されるようになっていくのだろうか。その背景には、これまでの葬儀や墓が、もともとあった既存の「つながり」、すなわち地域の相互扶助的な紐帯や家族という枠組みの継続性を基盤として成立していたのに対し、近年ではこうした共同性や継続性が自明のものではなくなりつつあるためである。例えば高度経済成長を契機に多くの人口が労働力として都市部へ流入するようになる

---

1 『民俗小事典 死と葬送』（2005）では「樹木葬」を「自然環境保全を志向して外柵や墓石を設けず、遺骨を土中に埋めて樹木を墓標とする自然共生型の墓地をいう」と説明しているが[井上 2005：135-136]、近年の樹木葬墓地の多様化を踏まえ、本稿ではさしあたり、「遺骨を直接土に触れさせる（遺骨が土へ分解されることを前提とする）こと」、「自然物（樹木・花・芝生など）を墓標のひとつとすること」の二点をもって「樹木葬」と言及する。なお、この定義では宮澤（2020）で扱った白光真宏会の墓地は「樹木葬」とはならないため、「樹木葬型の墓地」として表記している。

2 筆者は日本の樹木葬や散骨を含む、1990年代以降に世界中で見られるようになっていく環境へ配慮した葬法のことを「自然葬法」と呼んでいる。その暫定的な定義としては、「遺体や遺骨を自然に返し墓石を設けないなど、葬送が環境に与える影響を配慮した、あるいは自然のイメージやシンボル性を強調するような、既存の伝統的葬法とは異なる文脈で登場した葬送」をゆるやかに包括した概念として考えている[宮澤 2021：4-5]。

と、地方では葬儀や墓穴掘りの手伝いをする人々が減少することで、従来のあり方での葬儀は立ち行かなくなる。また、明治時代に墳墓が「家」の祭祀財産として規定されたことを背景に、「家」制度が法的に廃止された現在でも墓は家族によって維持継承していくべきとする意識が近年まで強く残っていたが、こうした「慣習」が少子化や女性の社会進出、個人の自立志向などの社会変化と摩擦を起こすようになっていく。このような既存の「つながり」の希薄化は、死者をとりまく様々な関係性が不安定なものになっていくことをも意味している。特に、墓や埋葬という側面から見ると、「つながり」の希薄化や個人化の傾向は、誰にも祀られることのない死者、つまり無縁仏を生じさせるものとして、現代社会における深刻な問題として議論されるようになっていく[森 2010；2014][小谷 2015][鈴木・森 2018]。

こうした既存の共同体の衰退と、それが墓や葬送に与える影響に対しては、これまでその原因や現状についての様々な議論が行われてきた。

例えば現代日本において無縁仏が生じてしまう構造的な原因を指摘したのが森謙二である。彼によれば、かつて教会が死者の救済を担ってきたヨーロッパでは、合理性や衛生上の観点から近代を通じて国家や行政が死者の管理を担うようになった一方、日本では近代の明治民法において先祖祭祀の機能が強化されたことにより、現在でも「家」が死者祭祀の責任を負うという構造が定着していると論じる[森 2010；2014]。したがって、ヨーロッパでは死者祭祀（埋葬）の責任を私的な家族ではなく国や社会が負うべきとする「埋葬義務」の考えが浸透するのに対し、日本では原則として「家」がその責任の主体となっているために、家族が解体する現在においては誰にも葬られない死者たち、つまり無縁仏が生じてしまうのだという。森のこうした議論は「誰もが埋葬される権利を保障する社会」の構築を目指す、社会福祉に墓地行政を位置付ける提言としても展開していく[森 2014：199-201]。

あるいは一方で、「家」や地域共同体などの既存の「つながり」の希薄化が不可逆的なものである以上、その代替としての新たな共同体に可能性を見出す論者もいる。例えば槇村久子は、従来の墓地（家の墓）が持っていた「尊厳性」「永続性」「固定性」という特徴が流動化した社会のなかで失われていった結果、「墓所を家族単位とせず、地縁・血縁によらずに同じ墓所に眠っている墓の形」、つまり共同祭祀という特徴を持つ「都市型共同墓所」が出現したと論じる[槇村 1996]。同様に、井上治代も家族形態の個人化から墓制が脱家化していく状況を見出し、そうしたなかで継承を必要としない墓を選択する人々が、家族や血縁者に代替する絆や縁づくりを生前に行い、これまでとは異なる新たな共同体によって死者祭祀を継続していると論じる[井上 2003]。

後者のように家族や地域共同体を代替する「つながり」として血縁・地縁によらない新たな「祭祀の共同性」を措定する議論に対しては、墓所を永続的に管理する主体としてのその共同体の信頼性を疑問視する声もある[森 2014]。しかし小谷みどり「墓の問題を考えると、遺骨の収蔵場所としての機能をどうするかということ、死者をどう偲ぶかということとを分けて考えなければならない」と指摘するように[小谷 2015：70]、遺骨や墓所の物理的な維持管理という問題と、追悼や祭祀を通じた死者を偲ぶという行為は、必ずしも同じも

のではないと言える。ただし、どちらも生者が死者を「弔う」行為であるという点では一致しており、この意味において、「つながり」とはこの弔いを行う主体、あるいはそうした主体が存在するための基盤として捉えられる。

しかしながら本稿では、こうした死者を弔う主体として「つながり」を捉えるのではなく、別の側面からも「つながり」を捉えてみたいと考えている。それはすなわち、死にゆく本人、つまり死者（となる人）を中心とした、死後に続いていく周囲との関係性としての「つながり」である。

なぜこうした意味での「つながり」に着目する必要があるのかと言えば、かつての「家」や地域共同体という既存の社会的関係性や、あるいはその代替として同じ墓に眠る新たな共同体を主張する議論は、もっぱら死者をとりまく生者のあり方を対象としているからである。しかし、より広い文脈で見れば、死者をとりまく「つながり」は、必ずしも生者との関係性にとどまるものではない。例えば以下でも論じるように、樹木葬を選択する人々は「自然と一体となる」という想像を行うことで、つまり自然と自身の死後の「つながり」を想定することで安心感を得ている様子が観察されている。このことは、人間関係の固定性が失われ社会関係がますます流動化しつつあるなかで、そうした人間関係に限定されない「つながり」の多様な可能性を提示するものとして、一考に値すると考えられる。もちろん、こうした意味での「つながり」は、無縁となった遺骨や無縁墓などの実際的な問題の解決に直接的に寄与するものではないだろう。しかし、こうした「つながり」の多様なあり方についても理解を深めることで、より安心を提供できる墓地のあり方を考えることにもつながるのではないだろうか。

そこで次章では、本稿で論じる意味での「つながり」をより具体的に示すため、R・J・リフトンが提唱した死生観に関する議論を参照しながら、この問題について考えてみたい。

## 2. 死後に続いていく「つながり」——「象徴的不死」の議論

本稿で考察する「つながり」についてより深く理解するために、ここではアメリカの精神科医である R・J・リフトンが提唱した「象徴的不死 (symbolic immortality)」の議論を参照する。

リフトンは広島原爆被災者やオウム真理教に関する著作のある、日本の歴史や宗教、文化、死生観に造詣が深い研究者である。彼は、フロイトに始まる 20 世紀の心理学的な思考が、これまで死という概念を軽視してきたという問題意識のなかで、「象徴的不死」という死の象徴化のモデルを提示する。「象徴的不死」とは、彼によれば、死後にも自分の存在が、なんらかの象徴を通じて継続していくという感覚とされる。ここにおいて重要なのは、死後に続いていく継続性の感覚（不死感 immortality）を持つとする営みは、人間にとって普遍的な欲求であるという前提である。このことについては共著のなかで以下のように述べられている。

「……不死感は、決して単なる死の否定ではないのである。……——不死感はむしろ、有限であるわれわれの個人的な生と、前にあったものおよびこの後に来るものとの間に、継続的・象徴的關係を強いてうちたてようとする、普遍的・内的な欲求の反映である。それは死という非継続性にもかかわらず、継続性を象徴化しようとする模索である。この模索は人間の企ての核心であり、文化的動物としての人間が文化と歴史を創造する行為の核心をなすものである」[加藤ほか 1977：13]。

つまり、生が死によって終わりを迎えても、なお続いていく継続性を探究することは、人間が生と死の意味を捉え、文化を営む際になくしてはならない人間存在の「核心」である、ということである。

リフトンの考えによれば、こうした不死の感覚は、以下五つの一般的な態様を通じて獲得される。すなわち(1)生物学的 (Biologic)、(2)神学的ないし宗教的 (Religious)、(3)創造的 (Creative)、(4)自然的 (Natural)、(5)経験的 (Experiential) な態様である。

少し冗長になるが、それぞれの不死の態様を簡単に要約してみよう。まず(1)の生物学的な不死の態様とは、自分から子孫へと続いていく家族の継続性に見出されるものであり、全ての態様のなかでも最も基本的かつ普遍的であるという。ただし、「生物学的」とは言っても、人間が文化的動物であるなら「家族」も純生物学的なものではなく、社会的に規定されるものである。したがって、「家」を中心とした日本の先祖祭祀をはじめとする死者との関わり方は、彼によれば生物学的不死の感覚の典型例として考えられている。(2)の神学的ないし宗教的態様とは、世界宗教で提供されるような死後の世界観に見出されるものであり、「来世」や「不滅の魂」といった概念で表されるという。(3)の態様である創造的不死の感覚は、芸術・文学・科学的な業績など、人が人生のうちに達成した仕事や他者へ与えた影響が、死後も存続するという感覚であるとされる。(4)の自然的態様における不死の感覚は、われわれをめぐる自然の環境が、空間や時間において無限に存続するという認識から得られるものであるという。これも(1)と同様、多様な自然の象徴的表現が浸透している日本の伝統文化においては、特に鮮明に見られるとしている。最後の(5)経験的超越は、ほかの四つと異なりややわかりづらいが、リフトンによれば恍惚ないし熱狂の境地に達した人間が、自分の死という感覚を失う心的状態であり、「忘我の境い」とも呼ばれる状態であるという[同前：12-25]。なお、これらの態様は決して相互に排他的ではなく、いくつか組み合わされる場合もあり、またその程度も様々であるとされている。

上記の文脈で言えば、リフトンも論じるように、日本の死者祭祀においては特に不死の生物学的態様、つまり血縁者との祭祀を通じた継続性によって、象徴的な不死の感覚が見出される傾向が強いと言える。これは言い換えれば、かつて柳田國男が述べた、「先祖は祭るべきもの、そうして自分たちの家で祭るのでなければ、どこも他では祭る者のいない人の霊」[柳田 1990 (1946)：14]という表現に近い感覚であり、日本人の感覚としても最もわかりやすいであろう。日本では、こうした家族や子孫との関係における継続性の感覚が広く認められるからこそ、「家」が衰退した現代社会では「祭る者のいない」ことへの恐怖が顕在化

し、問題として認識されるようになってきているのだとも考えられる。すなわち本稿の観点から言えば、リフトンの論じる不死の生物学的態様とは、家族という生者と死者の死後の「つながり」を表すものとも言い換えることができる。

ただし、上記のようなリフトンの議論において、新たな「つながり」のあり方を模索する本稿の観点から見て最も重要なのは、不死の感覚は決して生物学的なものにとどまらず、様々な態様を通じて獲得されうるということである。例えば先に触れたように散骨や樹木葬などの葬法における「自然に還る」という感覚は、リフトンの言葉を借りれば不死感の自然的態様として捉えることが可能である<sup>3</sup>。樹木葬を選択する人々は、遺骨が土の中で分解され自然の循環に溶け込むと想像することで、自らの存在が自分の死後も続いていくと考えており、この意味で言えばこれは自然との死後の「つながり」であると言える。また、神学的ないし宗教的な不死の態様が説明するように、信仰する宗教の死後観によっても、人々は不死の感覚を獲得する。例えば前年度に取り上げた白光真宏会の事例では、会の教義上、会員たちは「肉体は魂の器」という考えから遺骨や墓を重視していなかったが、「地球上の神聖なる地」としての霊園の位置付けが明確にされることで、彼らは信仰共同体としての死後の世界観を共有し、そこに死を超える継続性を見出すことが可能となっていたと考えられる[宮澤 2020]。

もちろん、リフトンによる象徴的不死の類型は、心理学的分析をベースにしたものであり、細かく事例を見ていけば、彼の類型に必ずしも当てはまらない不死の態様もあるだろう。しかし、自らの存在が死後も継続していくという不死の感覚が、人間が死に向かって生きるためには欠かせないものであり、それがいくつかの異なった仕方で獲得されるとする議論は、もっぱら家族（あるいはそれに代替される他者）による「つながり」を重視してきた日本の死者をめぐる議論に、別の角度からの考察の糸口を与えてくれるように思われる。そして実際に、現代日本に広まりつつある樹木葬墓地ではまさに、生者との「つながり」ではない形での新たな「つながり」のあり方が姿を見せつつあるのである。

### 3. 樹木葬墓地における「つながり」

#### 3-1. 「エコロジカルな不死」と樹木葬

さて、それでは現代において、上記で論じた意味での「つながり」を模索する際、筆者がこれまで調査を進めてきた新たな葬送の形態である樹木葬から見るとどうなるのかを考察してみたい。

ここで重要な参照点となるのが、人類学者の S・P・ボレーによる日本の樹木葬申込者の死生観についての議論である。彼は日本で最初に樹木葬墓地を開設した岩手県一関市の知勝院において、2006 年から 2008 年まで長期のフィールドワークを行い、その成果を発表

---

3 ただし、リフトンの「象徴的不死」の概念から、自然葬法における自然的不死の態様を見出そうとする試みは、筆者のオリジナルなアイデアではなく、Rumble(2010), Davies & Rumble(2012)の議論から多くの示唆を得ていることは注記しておきたい。

している。彼の議論の中心となるのは、樹木葬の申込者たちは、彼らの遺骨が土に還って動植物の栄養となり、自然の循環のなかへ溶け込むという「エコロジカルな不死 (ecological immortality)」の観念を形成していると指摘する点にある。

彼によれば、様々な背景を持って知勝院に集う樹木葬申込者たちは、それぞれが異なる死後の観念を持っている一方で、多くの場合に「自然に還る」という言説や考えを支持しているように見えるという。しかもこの「エコロジカルな不死」は、先祖祭祀に見出せる従来の不死の感覚——すなわちポレーのいう「社会的不死 (social immortality)」が、少子高齢化や都市化による「家」の解体のなかで衰退していくのに代わり、樹木葬という新たな葬送の実践において現れた死生観だというのである [Boret 2014]。ポレーのこうしたアイデアは、イギリスの自然埋葬について論じた D・デイヴィスによる "ecological immortality" の概念 [Davies 2005] を日本の樹木葬に適応したものであるため、彼の研究においては前述したリフトンによる「象徴的不死」への言及はない。しかし、彼のこの「エコロジカルな不死」における理解は、リフトンが日本人の死生観として強調した不死感の生物学的態様から、エコロジカルな世界観をベースにした不死感の自然的態様への移行、としても捉えられるだろう。つまり、彼の議論の文脈では、樹木葬墓地では家族や子孫による「つながり」よりも、自然の永遠性へ溶け込むという意味での自然との「つながり」が、より強く見出せるということである。

ポレーのこうした「エコロジカルな不死」の議論は、実は日本で初めて樹木葬を発案したことで知られる千坂峻峰自身による樹木葬の理解とも重なる部分がある。千坂は、人類にとって本来的なセーフティネットである家族や地域共同体から離れて自由の謳歌を望む現代の人々を、まさに様々な意味での“つながり”を失った存在として捉える [千坂 2013]<sup>4</sup>。そして、そうした“つながり”や永続性の危機に直面する現代の人々が、この流動化した社会のなかでどこに魂の安寧や永遠性を見出せばいいのかという問いを提示し、それに対し 40 億年近くにわたる生命の歴史にその可能性があると指摘する。彼は以下のように述べている。

「それゆえに 46 億年にわたる地球の歴史と 40 億年近くにわたる生命の歴史は、まさに生命の引継ぎの歴史、生命の縁起の歴史として、ある種の永遠性を日本人に与えることができる可能性を秘めている。……しかしながら、多くの生命とつながっているという感覚は、庶民にとって実感として得やすいものではない。そこで私は、中村〈引用者注：中村生雄〉が指摘したような“いのち”のつながりを実感でき、「癒しにみちたメッセージ」を受け止めてもらえるような“樹木葬”という新しい墓地を考案・実践したのである。樹木葬のコンセプトは、“多様性”と“小さな生命を見つめる”ことである」 [千坂 2013 : 184-185]。

---

4 ここで言う“つながり”とは、千坂 (2013) が中村生雄を引用しながら論じるところの、「ふるさと」「親元」「いえ」「むら」などとして表される、生物的・社会的存在としての人間が本来的に持つセーフティネットを表している。この“つながり”は本稿で言うところの「つながり」と多くの部分重なるところがあるものの、完全に同じ意味内容ではないため、千坂の表記をそのまま使用し本稿の「つながり」と区別している。

千坂のいう「多くの生命とつながっているという感覚」とは、ここでは家族や子孫に限定された「家」的な、あるいはボレーのいう「社会的な不死」のような「つながり」ではないことは明らかであるだろう。ここではそうした個々の社会的関係性を超越した、多様な生命の一部としての人間存在が想定されており、こうした事実が目覚めることで、人々は個人主義的な生活を送るなかで失ったかに見える「いのち“とのつながり”」を再び手にすることができる。そしてその「つながり」の自覚をよりわかりやすい形で促すために、多様な生命の息づく里山に骨を埋める樹木葬墓地を考案したというのである。千坂のこうした樹木葬の位置づけは、先述したように、ボレーの「エコロジカルな不死」の枠組みに多くの部分重なるところがある。

以上のように、家族や地域共同体との「つながり」が希薄になっていく現代の日本社会において、「つながり」を再び構築するために、人間を超えて存在し続ける自然が注目されていることが樹木葬墓地の事例から見てとることができるだろう。リフトンの「象徴的不死」の議論からもわかるように、人生において死に直面する際、自らの死後にも残る継続性、つまり自らの死に何かしらの意味が望まれるのは、人間の根源的な欲求であると言える。日本においてその欲求はこれまで、「家」の成員による先祖祭祀の実践を通じて担保されてきたと言える。しかし、その欲求の受け皿であった「家」が解体していく現代において、その代わりとなるものが求められている。そうした場所に、自身の遺骨を自然に残すことを通じて多様な生命とつながるという想像は、まさしく死後の継続性を自然的な態様において担保するものであると言えるだろう。

ただし、ボレーや千坂自身も自覚的であるように、人々に「つながり」を再び取り戻すための生命の多様性に満ちた樹木葬墓地というのは、おそらくこの里山保全活動と一体化した知勝院の樹木葬墓地に特有の、あまりほかでは見られない特殊なものである。なぜなら現在、日本に普及している多くの樹木葬墓地は、遺骨を土に還し、樹木などの植物を墓標とするという方式は共有しているものの、「いのち”のつながりを実感できる”場としての樹木葬墓地という千坂の理念までは受け継いでいないように見えるからである<sup>5</sup>。

それでは、自然や他の生命と一体化するという感覚における「つながり」のあり方は、ほかの樹木葬墓地では論じることができないのだろうか。

結論から言えば、そのように考える必要はない。なぜなら、再びリフトンの「象徴的不死」の議論を参照すれば、不死の感覚を抱く、つまり何かとの死後の「つながり」を求める欲求というのは、生と死の間に象徴的な継続性を打ち立てようとする試みであり、樹木葬墓地における「自然」も、「象徴的不死」の観点から言えば、必ずしも実質的な生命の多様性を提供する墓地である必要性はないからである。つまりもっとも重要なことは、自然環境の質や「遺骨が土に還る」という表現に関する客観的な事実ではなく、死に直面した本人が、自ら

---

5 日本における樹木葬墓地の多様化については、例えば森林ジャーナリストの田中敦夫や、ランドスケープ研究の上田裕谷がやや批判的に紹介している[田中 2016][上田 2018]。

の存在が「死後に続いていく」というイメージを、自然や樹木などの象徴を通じて獲得することだからである。

こうした樹木葬墓地における「象徴」としての「自然」を示す興味深いデータとして、例えば知勝院に後続する二つの樹木葬墓地で実施された樹木葬申込者への意識調査を取り上げてみたい。一つは知勝院の運営方法に近い、山林をまるごと樹木葬墓地に転換した地方寺院による樹木葬墓地（千葉県いすみ市・天徳寺）で、もう一つは民間霊園の一面を部分的に樹木葬墓地として整備した NPO 法人の例である（東京都町田市・NPO 法人エンディングセンター）。特に後者の樹木葬墓地は、墓石に囲まれた従来的な霊園のなかに位置し、千坂の主張するような「“いのち”のつながり」や「生命の多様性」は一見すると感得されづらいようにも思える。しかし、これらの墓地で行われた、複数回答形式で樹木葬を選択した理由を問う設問をみると、面白いことがわかる。

これらの調査では、用意された選択肢がそれぞれで異なるために単純な比較はできないものの、実はどちらにおいてももっともよく選ばれた回答が、「自然に還りたい」83.1%（天徳寺, n=165）、「自然(土)に還ることができる」74.1%（エンディングセンター, n=1213）というものであった[金 2009：128-129][井上 2016：246]。つまり、自然再生を目指した墓地でなくても、「自然へ帰る、一体化する」という自然との象徴的な「つながり」が、樹木葬を選択する人々にとって重要な位置を占めていたということが言えるのである。そして、これらの動機を問う質問では、この「自然に還る」という選択肢の次に選ばれていたのが、どちらも墓の継承や子どもへの負担について懸念するものであった点も注目すべきである。例えば天徳寺では、「継承者がいなくてもよい」が 68.7%で第二位[金 2009：129]、エンディングセンターでは「継承者がいなくてもいいから」が 57.5%で第二位、「跡継ぎのことなど、子どもに負担がかかるので、自分の代で終わりにしたいから」が 39.7%で第三位となっていた[井上 2016：246]。

こうした調査の結果をもって、ただちに彼らのなかに自然との死後の「つながり」を求める強い意識があると断定することはできないかもしれないが、墓の継承者の不在や子どもへの負担から、あえて継承の必要ない樹木葬を選択する彼らにとって、自然との「つながり」は家族との「つながり」に代わり、リフトンの論じる象徴的な不死の感覚を与えるものであるとは言えないだろうか。

### 3-2. 樹木葬墓地における「つながり」の多様性

さて、ここまでリフトンの「象徴的不死」やボレーの「エコロジカルな不死」の議論を手がかりとしながら、樹木葬墓地においては、自然という象徴を通じた死後に続いていく不死の感覚、つまり自然との「つながり」が見出せることを論じてきた。また、二つの樹木葬墓地で実施された意識調査の結果を参照すると、どちらの墓地においても「自然志向」と「脱継承」という、井上（2003）が指摘したような傾向が樹木葬申込者に見られ、本稿の文脈で言えばそれは家族的な「つながり」よりも自然との「つながり」を求める声として理解できるものであった。



しかし、誤解のないように断っておけば、本稿は家族との「つながり」が、現在では自然の「つながり」にとって代わられつつあるということを論じるものではない。むしろ本稿で示したいのは、冒頭でも述べたように「つながり」の多様性や重層性であり、それは「自然と一体化する」という死後の継続性の感覚を特別視するものではない。

このことを示すため、ここでは2015年に筆者が行った樹木葬申込者へのインタビューの事例を取り上げたい。このインタビューは金と井上が調査を行ったのと同じ、千葉県天徳寺の樹木葬申込者と、東京都のエンディングセンター会員を対象に実施したものである。なお、ここで引用する事例はすべて、元のデータの直接的な引用ではなく、すでに論文としてまとめている[内田(宮澤) 2016][内田(宮澤) 2017]を出典とすることを断っておきたい。また年代の表記は調査実施当時のものである。

筆者の実施したインタビューでは、自然を通じた「つながり」、つまり「エコロジカルな不死」や「象徴的不死」の自然的態様の感覚を明らかに表現した語りがいくつか見られた。ここでは二人の事例を見てみよう。例えば天徳寺に樹木葬墓地を申し込んだ70代(当時)の男性は以下のように述べている。

「『輪廻』っていうのをどういうふうに解釈するかっていうのがあって。例えばAという人間がまるまる死んで、土に還って、Bという人間であるか、植物であるか、犬であるかわからんけど、という意味での『輪廻』っていうのがね、感覚としてあるんだとするとね、……そういう意味での『輪廻』っていうのは、ないだろうと。生まれ変わりっていうのはね。でも、元素に分解して、カルシウムになり、カーボンなり、全部に分かれて、木の根っこから吸い上げられて、花になり、というような意味での、生まれ変わり、なら、全然べつ次元の問題なんだけど。そういう意味での『輪廻』ならあるかもしれない。それは命の再生と言えるかどうかはわからんよ。……でも生まれ変わるという感覚っていうのはそういうものではないの。」

(2015年5月21日)

また、エンディングセンターで樹木葬墓地を申し込んだ60代(当時)男性は以下のように述べている。

「土に溶け込んで、何かの栄養になって、ということであれば、桜がそれを吸ってくれるのであれば、毎年花を咲かせて、糧になるなど。で、それを見ることによって誰かが癒される。それが次から次へとつながっていくのであれば、これ以上の幸せはないんじゃないかと。」

(2015年6月21日)

彼らはどちらも、樹木葬墓地で土に埋められた遺骨が、「元素に分解」されて、植物に吸い上げられ、「栄養」となることを想定している。最初の男性の場合には、これは仏教的な

意味ではない科学的な理解に即した意味での「輪廻」あるいは「生まれ変わり」と表現されており、後者の男性においては「糧」として表されるものである。どちらにおいても、自らの死の後も、遺骨が土のなかで分解し、植物の栄養となって存在し続けるということを認識していることがわかる。こうした意味での死を超えた「不死」の感覚は、まさしく自然や動植物という象徴を通じた「象徴的不死」の感覚であると言える。

しかし、二番目に挙げたエンディングセンター会員の男性の言葉を注意深く見てみればわかるように、彼は遺骨が土に溶け込んで桜の木の栄養となるだけでなく、その桜を見ることによって「誰かが癒される」ことにも言及している。そして、その「癒し」が次々と、多くの人へつながっていくことを「これ以上の幸せはない」と述べている。ここでは、自然との「つながり」だけでなく、自然という象徴（ここでは「桜」）を媒介とした他者の存在——家族に限られない「誰か」——との「つながり」までもが想定されていると言える。

同じようなことは、天徳寺で樹木葬墓地の区画を契約したが、長女以外の家族には場所も教えていないという70代の女性にも当てはまる。家族に墓参りを望まないという彼女は以下のように語っている。

「お墓参りっていうか、私も子どもたちにわざわざここに来て手を合わせてって、それは望んでないんですよ。ただ桜の花は、必ず咲くから、桜が咲いたときに、思い出して、友達なんかでも思い出してもらえたらいいな—っていうそういう気持ちはありますね。」

(2015年4月24日)

彼女は家族による祭祀を望んでいないが、この語りを見る限り、それは彼女が自然と一体となることのみをもって死を納得しているということを意味しない。彼女は自らが栄養になった桜の木を通じて、友人などの他者に思い出してもらうことを期待しているのであり、そこには先ほど挙げた二番目の男性と同様、自然という象徴を通じた他者との「つながり」への希望が見出せるのである。

このように、自然との「つながり」というのは、確かに従来の家族との「つながり」が不安定となる現代において、変わらず死を超えた継続性を望む人々をひきつけるものである。しかし、それは単に自然との一体化における継続性にとどまるものではない。樹木葬申込者たちは、少なくとも筆者の調査の範囲においては、他者との関係性——不特定多数の人であったり、友人であったり、ときには家族でもあったりする——を排除せず、そうした関係性をむしろ、樹木や桜の木という死後に続く存在を通じて望んでいる／期待しているように見えるからである。これは、樹木葬墓地における自然との「つながり」が、家族などの他者の存在を拒む排他的なものではなく、ほかの多くの「つながり」のあり方にも開かれた開放的な側面を持つものであることを示している。

#### 4. イギリスの自然埋葬における「つながり」

以上、日本の樹木葬申込者たちの事例から示されたように、自然を媒介とした「つながり」

のあり方には多層性があり、決してほかの「つながり」を排除するものではないことがわかる。しかしその「つながり」方の傾向は、実は国や文化によって異なることが、同じく遺体を自然に還す葬送であるイギリスの自然埋葬 (natural burial) から見てとることができる。ここではまず、日本の樹木葬と同様、環境に配慮した葬送であるイギリスの自然埋葬の概要を述べたうえで、筆者の調査データから、自然を通じたさらに別の「つながり」のあり方を提示してみたい。

イギリスの自然埋葬について、日本では「樹木葬」と表現されることもあるが、実際は日本の樹木葬とは異なる点が多々ある。まず、自然埋葬では基本的に、焼骨ではなく遺体の埋葬を前提とする。その際、遺体はエンバーミング (薬品等による遺体保存処理) されていないこと、棺 (あるいは埋葬布) は自然分解可能な素材のものをを用いることが求められる。現在、「自然埋葬地」として認識される埋葬地／墓地は、イギリス全土で 300 カ所以上と見積もられている [Callender et al. 2012]。法的な規制の寛容さから地方自治体、農家、民間企業、慈善団体など様々な個人／団体が運営に参画しており [Clayden et al. 2015]、運営や景観においても多様な形態が存在する。

イギリスにおける自然埋葬は、1993 年にカンブリア州のカーライル市営墓地で、当時の墓地マネージャーであった K・ウエストが実施した「森林埋葬地 (Woodland Burial Site)」が発端とされている。墓地環境の整備・効率化や野生生物の保護、またより多くの選択肢を望む利用者からの要望といういくつかの文脈が合流し、墓地内に芝刈りの回数を減らして粗放的管理を行う自然保護区画が設けられ、これが後年「自然埋葬 (natural burial)」と呼ばれ全国に広まるようになる、環境を意識した埋葬地の原型となったのである [武田 2008][Clayden et al. 2015]。

さて、この自然埋葬における死生観については興味深い議論がある。イギリスでは数少ない、国教会が運営する自然埋葬地でフィールドワークを行った人類学者の H・ランブルは、自身の博士論文を下敷きにした共著のなかで、自然埋葬を選択する人々の語りにおいては、その選択を通じ何かに「お返しする (giving something back)」という考えが顕著に見られることを明らかにしている。つまり、遺体を自然埋葬地に葬ることは、献体や臓器提供などと同様、社会的な善のために自らの／親族の遺体をもって「贈与 (gift giving)」するという考えが見られるというのである。少し長くなるがその議論を引用してみたい。

「これらの贈与についての言及をより理論的な方向に発展させるために、私たちは、自然埋葬が、自分自身や亡くなった親族を「自然」に「贈与」する、あるいは「子供や孫に大切な贈り物をする」というイディオムを通して、生者と死者、そして世界における彼らの居場所との間の社会的関係を再構成しているのだと提案したい。このような用語は、これまで医学的研究のために自分の身体を提供するという発想と実践の中でしか得られなかった、より広い社会的価値観との関連での贈与の概念を呼び起こす。しかし、自然埋葬と臓器や血液の提供は、社会的責任と社会全体の利益に貢献するという点では、ある程度共通しているのである。」 [Davies & Rumble 2012 : 98-99]

これを本稿の立場に引き付けて言えば、自然埋葬を選ぶ人々は、その実践を通じて自然と一体となるということだけでなく、さらにそれが社会的な公共性へと寄与する（「贈与する」）のだと考えることで、次の世代や社会のなかに自身の存在が残り続けること、つまり「つながり」を持つことを期待しているのだと解釈できる。なぜならそれが、リフトンの象徴的不死の議論からもわかるように、彼らの死を意味付ける象徴的な継続性となりうるからである。

ランブルの主張や、それを元にした筆者の解釈は、筆者が2019年に実際にインタビューした自然埋葬選択者の語り<sup>6</sup>からも見てとることができる。例えば父親の遺灰を自然埋葬地に埋葬した50代の女性は以下のように述べている。

「もしそこへ行ったら〈筆者注：父親を火葬した火葬場付属の庭園にその遺灰を散骨したら〉、その遺灰はそこには長くはいない、つまり何も残さないのです。……父を埋骨した場所〈筆者注：自然埋葬地のこと〉は手付かずの自然を残さないでしょうが、何かしら動物や植物の栄養にはなるでしょう。何かを残すことができるのです（It leaves a legacy）。」

（2019年12月23日）

彼女は父親がすでに生前に火葬プランを購入していたため、父親を土葬ではなく火葬したのだが、その遺灰を彼女が「何も残さない」と評した火葬場付属の散骨場に撒くのではなく、将来的に果樹園となることが予定されている自然埋葬地に埋葬した。そうすることで、彼女は父親の遺灰が、「何かを残す」ことになると考えたからである。

また、自身のために自然埋葬を望んでいる40代の女性も以下のように述べている。

「死から生じることの良さだとはるかに多く感じているのは、墓地の一部ではなく、森の一部、風景の一部になることです。」

（筆者）「火葬や[従来の墓地への]埋葬は好きではない？」

「ええ。むしろ自分の体が大地の栄養になってほしいという気持ちの方が強いです。」

（2019年11月23日）

このように、親しい親族を葬る場合でも、自身が葬られる場合でも、彼らにとって死というものは単なる「終わり」ではない。彼らは死者の遺体／遺灰が自然埋葬で葬られることによって、新しい何かを生み出すことができるという希望を明確に感じているのである。

一方でランブルも指摘するように、こうした言説は自然埋葬の申込者だけでなく、自然埋葬に関わる葬送業者にも共有され、ときには戦略的に利用されている[Davies & Rumble

---

6 2019年11月から2020年1月にかけて、イギリスの自然埋葬実施者／希望者7名と、自然埋葬に関わる葬儀関係者10名に行ったインタビュー調査のこと。詳しくは宮澤（2021）を参照。

2012 : 98]。

例えば既に述べたように、自然埋葬地には運営主体によって様々な形態があるが、近年人気を集めているのが、自然埋葬地運営のノウハウを持った企業が、農場などの土地を所有する地主と提携し、一定の質を保った自然埋葬事業を展開する事例である。ここではそのひとつ、J・リーダムとI・ウォールズによって2003年に立ち上げられた「リーダム・ナチュラル・ヘリテージ」を取り上げたい<sup>7</sup>。ウェールズから出発したこの企業は、現在ではイングランド、ウェールズ、スコットランドに開設された計9つの自然埋葬地の運営に携わっているが、これらの自然埋葬地に特徴的なのが、埋葬地を墓地として利用するだけでなく、放牧場として利用し、将来的には農場として持続的に管理していくという方法を採用している点である（写真1から4）。埋葬が行われた場所では羊や牛が放牧されるため、墓標となる植樹は行われぬ。しかも動物たちの放牧のあと、埋葬地はそこらじゅうが糞だらけになるのだが、それでも埋葬を通じて遺体が動植物の栄養となり、同時にイギリスの美しい田舎の原風景を維持することに役立つという観点から人気を集めているのである。

このように、自然埋葬においては、日本と比較し、死を通じて生者や社会の「役に立つ」ものとなるという言説が人々を惹きつける傾向にあると言える。これは自然埋葬だけでなく、近年、火葬場から排出される熱の有効利用、遺体のアルカリ溶液分解<sup>8</sup>やフリーズドライ<sup>9</sup>の技術等、遺体を「処理の対象」から生者の「役に立つもの」として活用する葬法が注目を集めているというイギリスなど欧米の社会的な文脈[Rumble et al. 2014]とも対応する。イギリスの自然埋葬は、遺体を自然埋葬にすることを通じて公共性に貢献する、すなわち死者が死んだのちも、広く社会との「つながり」を持つことを可能にする葬送として捉えられているとすることができるのである。

---

7 Leedam Natural Heritage, (<https://www.leedam.com/>, 2021.2.25 閲覧).

8 一般的には alkaline hydrolysis と呼ばれる方法で、遺体を専用の機械のなかでアルカリ性の溶液に浸し、熱や圧力を加え遺骨にする。残った液体は行政の排水処理計画にのっとりリサイクルされたり、肥料として使用することが計画されているという[Rumble et al. 2014 : 5-6]。提供する企業によって Bio Cremation や Resomation などの名称が商標登録され使用されている。詳しくは以下のHPも参照。

Matthews Environmental

Solutions, (<https://matthewsenvironmentalsolutions.com/us/cremation/cremation-equipment-na/bio-cremation-na>, 2021.3.3 閲覧).

Resomation, (<https://resomation.com/>, 2020.3.3 閲覧).

9 遺体を液体窒素を用いて超低温で凍らせ、振動を与え細かく砕いて遺灰のようにする方法[Rumble et al. 2014 : 7]。こちらも提供する企業によって、Cryomation や Promession などの名称が流通している。詳しくは以下のHPも参照。

Cryomation, (<http://cryomation.co.uk/>, 2021.3.3 閲覧).

Promessa, (<http://www.promessa.se/>, 2021.3.3 閲覧).



(写真1) ウェールズのアースクにある自然埋葬地。埋葬場所を示す墓標は何もない。  
2019年8月10日筆者撮影。



(写真2) ウェールズのアースクにある自然埋葬地。埋葬場所と思われる場所に花が供えてある。  
2019年8月10日筆者撮影。



(写真3) イングランドのバース市近郊にある自然埋葬地。2019年2月12日筆者撮影。



(写真4) イングランドのバース市近郊にある自然埋葬地。埋葬から間もない墓所。  
2019年7月26日筆者撮影。

## 5. 様々な「つながり」のあり方を考える

以上のように、日本の樹木葬とイギリスの自然埋葬の実践を考察してみると、そこには特定の生者との関係にとどまらない、自然と一体化することを通じた様々な「つながり」のあり方が存在することがわかる。そして、これまで見てきたように、文化によってどのようなつながり方が好まれる傾向にあるのかは異なっているようである。例えば日本では、「自然に還る」という言説が支持されるが、そこには遺骨の栄養を吸収した動植物を通じて他者に認識してもらい、思い出してもらい、思い出してもらえることが好まれているように見える。それはおそらく、日本がいまだに、イギリスと比較すれば家族的な「つながり」が重視されており、親密であった他者との関係性の継続が死後も望まれているという点から来ているのかもしれない。その一方で、墓参が家族の義務ではない、高度に個人化したイギリスでは、自然埋葬を通じた自然における死後の継続性は、より広い社会への公共性に寄与する点が重視されている。ここにおける「つながり」は、特定の他者というよりは、未来の世代や地球の自然環境など、社会的な公共性への貢献を通じた、より広く不特定多数の次世代との「つながり」が意識されていると言える。

ただし、このような異なる傾向はお互いに排他的ではない。例えば日本の樹木葬でも、初年度に取り上げた日本生態系協会が運営する「森の墓苑」のように、環境保護に特化した墓

地では公共性への可能性は開かれているし[内田（宮澤） 2019]、イギリスの自然埋葬でも家族的なつながりが全く失われているわけではないからである[Davies & Rumble 2012]。

本稿で日本の樹木葬やイギリスの自然埋葬の事例から、特定の生者との関係にとどまらない、様々な「つながり」のあり方があることを可能性として示してきた。この試みは従来、日本で重視されてきた家族や地域共同体における「つながり」、またその代替としての共同性を求める議論を相対化するためでもあった。個人のライフスタイルや好みが多様化し、流動化した現代社会において、従来の意味での「つながり」が不可逆的に解体するとしても、そうした既存の「つながり」の代替を求めると言うよりは、別の視点から「つながり」を捉え直し、その可能性を探ってみることが目的であったからだ。本稿はもちろん、無縁となった遺骨や無縁墓などの実際的な問題の解決に直接的に寄与するものではないが、今後の日本の墓制を考えるうえで何らかの議論に貢献できれば幸いである。

#### 【参考文献】

- 井上治代 2003『墓と家族の変容』岩波書店。
- 井上治代 2005「樹木葬」新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小事典 死と葬送』吉川弘文館：135-136。
- 井上治代 2016「現代日本における樹木葬の実態と今後——背景・形態・申込者の状況」『ライフデザイン学研究』11：235-247。
- 上田裕文 2018『こんな樹木葬で眠りたい——自分も家族も幸せになれるお墓を求めて』旬報社。
- 内田（宮澤）安紀 2016「現代日本における「樹木葬」の展開——現代人の死生観の変化をめぐって」2015年度筑波大学提出修士論文、未公開。
- 内田（宮澤）安紀 2017「現代日本における葬送と自然——「自然に還る」というイメージをめぐって——」『宗教と社会』23：15-29。
- 内田（宮澤）安紀 2019「樹木葬墓地が拓く公益的な墓地活用の可能性」冠婚葬祭総合研究所『論文集（平成30事業年度）——冠婚編・葬祭編』62-65。
- 加藤周一・ライシュ, M・リフトン, R.J. 1977『日本人の死生観 上』矢島翠訳、岩波書店。
- 金亮希 2009「樹木葬会員の意識からみた樹木葬墓地の今後の課題」『東京大学農学部演習林報告』121：117-148。
- 小谷みどり 2015『誰が墓を守るのか——多死・人口減少社会のなかで』岩波書店。
- 鈴木岩弓・森謙二編 2018『現代日本の葬送と墓制——イエ亡き時代の死者のゆくえ』吉川弘文館。
- 田中淳夫 2016『樹木葬という選択——緑の埋葬で森になる』築地書館。
- 武田史朗 2008『イギリス自然葬地とランドスケープ——場所性の創出とデザイン』昭和堂。
- 千坂峻峰 2013「ケアと死生観——樹木葬の挑戦 いのちを見つめる墓地」広井良典編著『ケアとは何だろうか』ミネルヴァ書房：175-189。

- 楨村久子 1996 『お墓と家族』 朱鷺書房。
- 宮澤安紀 2020 「新宗教団体における樹木葬墓地の考察——白光真宏会「富士聖地自然霊園」の事例から」 冠婚葬祭総合研究所 『論文集（令和元年度）』 61-67。
- 宮澤安紀 2021 「日英の自然葬法に関する宗教社会学的比較研究」 2020 年度筑波大学提出博士論文、2021 年オンライン公開予定。
- 森謙二 2010 「人間（死者）の尊厳性と「埋葬義務」——「葬送の自由」のほころび」 岩上真珠・森謙二・鈴木岩弓・渡辺秀樹 『いま、この日本の家族——絆のゆくえ』 弘文堂：132-175。
- 森謙二 2014 『墓と葬送のゆくえ』 吉川弘文館。
- 柳田國男 1990 (1946) 「先祖の話」 『柳田國男全集 13』 ちくま文庫：7-209。
- Boret, S. P. 2014 *Japanese Tree Burial: Ecology, Kinship and the Culture of Death*. Routledge.
- Callender, R., Dinius-Inman, L., Inman-Cook, R., Jarvis, M., Dr Mallatratt, J., Morris, S., Pidgeon, J. & Walwyn, B. 2012 *The Natural Death Handbook*. The Natural Death Centre.
- Clayden, A., Green, T., Hockey, J. & Powell, M. 2015 *Natural Burial: Landscape, Practice and Experience*. Routledge.
- Davies, D. J. 2005 *A Brief History of death*. Blackwell Publishing. (D. J. デイヴィス 2007 『死の文化史』 森泉弘次訳、教文館) .
- Davies, D. J. & Rumble, H. 2012 *Natural Burial: Traditional-Secular Spiritualities and Funeral Innovation*. Continuum.
- Rumble, H. 2010 ““Giving something back”: A case study of woodland burial and human experience at Barton Glebe.” PhD thesis for University of Durham.
- Rumble, H., Troyer, J., Walter, T. & Woodthorpe, K. 2014 “Disposal or dispersal? Environmentalism and final treatment of the British dead.” In *Mortality* 19 (3) : 243-260.